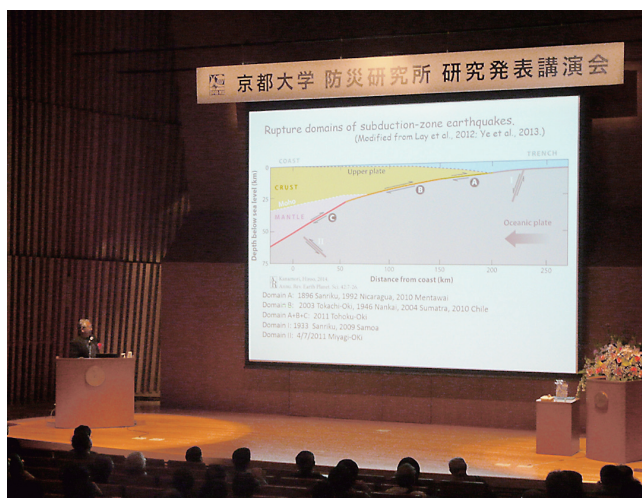


DPRI Newsletter

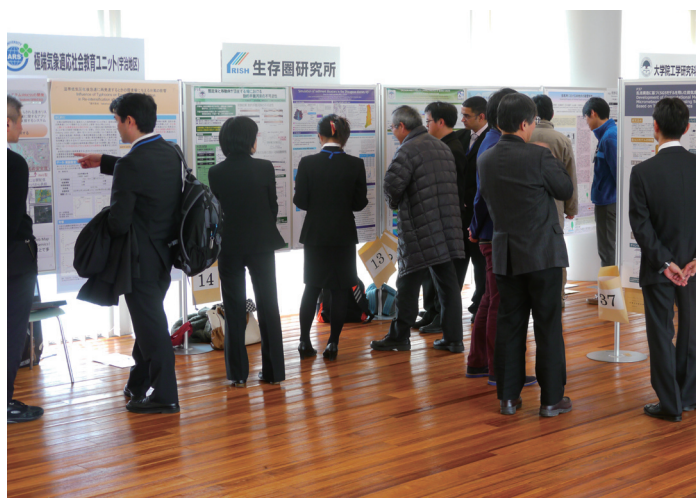
Disaster Prevention Research Institute
Kyoto University

No.72 2014年5月

京都大学防災研究所



研究発表講演会 (P2)



研究発表講演会ポスターセッション (P2)



UNESCO-IHP 研修集合写真 (P4)

CONTENTS

イベント2
平成 25 年度防災研究所研究発表講演会報告 澤田 純男
同 優秀発表賞・研究奨励賞

研究集会4
第 23 回 UNESCO-IHP 研修コース
「気候変動下の河川流域管理のための生態水文学」を実施
田中 賢治

シリーズ 若手研究者の声5
被災地の今 久保 久彦

掲示板6
平成 26 年度共同研究・研究集会
平成 25 年度学会賞等の受賞一覧
中島正愛教授 2014 年度 George W. Housner Medal 受賞
新スタッフ紹介
人事異動
頭脳循環ニュースレターNo.3 のご案内

イベント

平成 25 年度防災研究所研究発表講演会報告

平成 25 年度防災研究所研究発表講演会は、平成 26 年 2 月 27 日（木）と 28 日（金）の両日にわたり、宇治キャンパスのおうばくプラザ、防災研究所本館、木質ホールで開催しました。

27 日午前は、本研究所の大志万直人所長の挨拶に続き、第 1 回 DPRI Award 受賞式を執り行い、カリフォルニア工科大学の金森博雄名誉教授に賞状と記念品が授与されました。続いて、受賞者である金森博雄名誉教授による受賞記念講演「巨大地震の多様性とそれに応じた減災対策」と、東京大学地震研究所巨大地震津波災害予測研究センターの堀宗朗教授による招待講演「大規模数値計算の地震工学への適用可能性」が行われました。

27 日午後には、災害調査報告「台風 18 号の豪雨災害と日吉ダムの洪水調節効果」（角哲也教授）、「台風 26 号による伊豆大島の斜面崩壊」（寺嶋智巳准教授）、「台風 Haiyan によるフィリピンレイテ島の高潮災害」（安田誠宏助教）と題して 3 件の災害の状況が報告されました。

一般講演とポスターセッションは、27 日午後から行われ、総合防災、地震・火山、地盤、大気・水、グローバル COE のテーマ別に、186 の最新研究成果が発表されました。2 日間合わせて、一般市民、自治体職員、民間企業、学内外研究者等のべ 380 名を超える参加者があり、盛況のうちに終了しました。

今年度より、若手研究者の積極的な参加と発表を促し若手研究者の研究を奨励するとともに研究発表講演会のいっそうの活性化を図ることを目的とした「防災研究所研究発表講演会優秀発表賞」が大幅に拡充されました。講演会終了後の懇親会で、発表内容が優れていた 12 名の若手研究者・大学院生に大志万所長が表彰状を授与し、さらにその中でも特に秀逸と認められた野口峻佑さんに、研究奨励賞（研究費助成）が贈られました。

（行事推進専門委員会 澤田 純男）



DPRI Award 授賞式



金森博雄名誉教授



堀宗朗教授



角哲也教授



寺嶋智巳准教授



安田誠宏助教



研究発表の様子



ポスターセッションの様子

平成 25 年度防災研究所研究発表講演会の優秀発表賞・研究奨励賞

研究奨励賞 受賞者コメント

この度は研究奨励賞を頂き、誠にありがとうございます。まさか賞を頂けるとは予想していませんでしたので非常に驚きましたが、大変光栄に存じます。また、指導教員である向川均先生に、日々楽しく研究させてもらっていることに改めて感謝申し上げます。

発表では、冬季北半球成層圏で卓越する、北極の周りをぐるりととりまく強い西風（極夜ジェット）を伴う周極渦が分裂して崩壊するという、地球規模の顕著な大気現象の予測可能性に関する研究を紹介しました。この研究では、気象研究所のアンサンブル予報システムを用いた稠密な再予報実験により、極渦の分裂を伴う崩壊現象の予測は、分裂を伴わないものよりも、予測が困難であることを示すことに初めて成功しました。また、極渦の分裂を引き起こす前駆現象の特定も試みました。このような予報実験は、黒田友二主任研究官、藪将吉主任研究官をはじめとする気象庁気象研究所の皆様のご協力により実現できたことであり、深くお礼申し上げます。今後も協働して、地球規模の大気現象のメカニズムと予測可能性の解明を目指したいと思います。

また、榎本剛先生をはじめとする災害気候研究分野の皆様、及び関係する研究室の皆様からの励ましによって、のびのびと研究に取り組むことができていたことに、改めて感謝申し上げます。今回の受賞を糧に、益々、日々研鑽に励みたいと思いますので、今後とも皆様のご指導とご鞭撻のほど、宜しく願いいたします。

（気象・水象災害研究部門 野口 峻佑 [理学研究科 D2]）

平成 25 年度研究発表講演会 優秀発表賞・研究奨励賞 受賞者（順不同）

発表セッション	部門・センター	分野・領域	MC/DC (受賞当時)	氏名	発表題目
総合防災	地震防災研究部門	耐震機構研究分野	研究員 (科学研究)	Yongtao BAI	Damage Progressing and Collapse of Tall Buildings with Various Beam-Column Strength Deterioration Factors
大気・水	気象・水象災害研究部門	沿岸災害研究分野	DC3	二宮 順一	台風下の吹送流に対する波浪の影響
大気・水	気象・水象災害研究部門	水文気象災害研究分野	DC2	増田 有俊	Xバンド偏波レーダによる粒子判別結果を用いた降水セルのライフステージ判別
大気・水	気象・水象災害研究部門	水文気象災害研究分野	MC2	西脇 隆太	ゲリラ豪雨の早期探知と危険性予測システムの開発とさらなる高度化に関する研究
大気・水	気象・水象災害研究部門	災害気候研究分野	DC1	野口 峻佑*	成層圏周極渦分裂現象の予測可能性：2008/2009年冬のアンサンブル再予報実験
大気・水	水資源環境研究センター	地域水環境システム研究領域	MC1	浅野 倫矢	ヴィクトリア湖集水域における陸域水循環モデルの構築
GCOE	水資源環境研究センター	社会・生態環境研究領域	DC2	Taymaz ESMAEILI	Three Dimensional Numerical Modeling of Flow Field and Flushing Channel Formation in Reservoirs
地盤	地盤災害研究部門	山地災害環境研究分野	MC2	中野 真帆	2009年パダン地震が引き起こした崩壊性地すべりの地形・地質的特徴
地盤	地盤災害研究部門	傾斜地保全研究分野	DC1	柴崎 達也	地温の季節変動が斜面変動に及ぼす影響
地震・火山	地震災害研究部門	強震動研究分野	MC2	佐藤 佳世子	2011年東北地方太平洋沖地震時の大阪堆積盆地での長周期地震動特性
ポスター	巨大災害研究センター	巨大災害過程研究領域	DC3	孫 英英	身体の移動が作り出す空間一個別避難訓練を通して
ポスター	地震災害研究部門	強震動研究分野	DC2	久保 久彦	広帯域地震動生成の観点に基づいた2011年東北地方太平洋沖地震の震源モデル

* 研究奨励賞受賞者



左から久保久彦さん、孫英英さん、佐藤佳世子さん、柴崎達也さん、中野真帆さん、Taymaz ESMAEILI さん、大志万所長、浅野倫矢さん、野口峻佑さん、西脇隆太さん、二宮順一さん、Yongtao BAI さん

研究集会

第23回 UNESCO-IHP 研修コース「気候変動下の河川流域管理のための生態水文学」を実施

防災研究所水資源環境研究センターでは、名古屋大学地球水循環研究センターと共同で、UNESCO 国際水文学計画 (IHP) 短期研修事業 (IHP 研修コース) を実施しています。研修コースは両センターがそれぞれ隔年で担当し、今回は2013年12月2日(月)から13日(金)の2週間にわたり、第23回目の研修コースを防災研究所で実施しました。

今回は「Ecohydrology for River Basin Management under Climate Change (気候変動下の河川流域管理のための生態水文学)」をテーマとし、(1)河川流域スケールでの気候変動の水文学的、生態学的影響評価に関する最新の知識の獲得、(2)水文過程、生態過程の気候変動影響評価の具体的な手順の習得、ならびに、(3)気候変動に対する水文学的、生態学的応答を水資源管理に取り入れる可能性を議論することを目的としました。

内容は、11項目の講義、6項目の屋内演習、1日間の野外実習に加え、1日間は琵琶湖から瀬田川を経て、天ヶ瀬ダム・宇治川の現地視察を実施しました。

講義は、水文学、気象学、生態学、水資源管理、環境システム、総合土砂管理、貯水池操作など、生態水文学に関係する広範なテーマをカバーし、防災研究所、大学院工学研究科、日本気象協会、東北大学、国連大学の教員が担当するとともに、UNESCOのアジア・太平洋支部、アジア・太平洋生態水文学センター、欧州生態水文学センターから外国人講師を招聘し、充実した内容となりました。

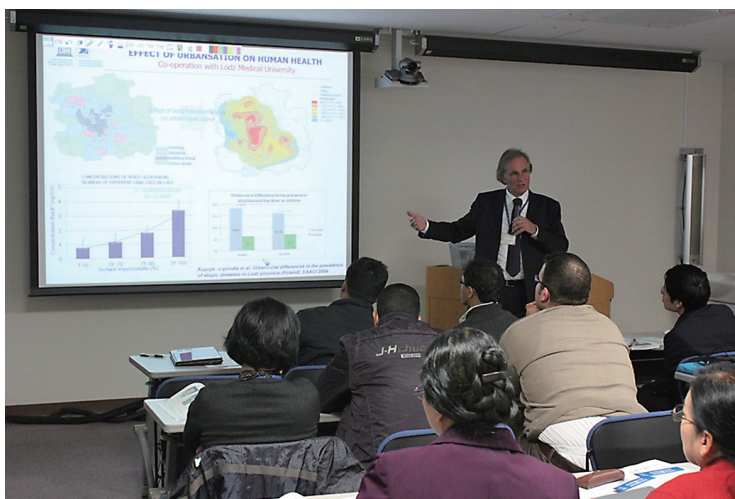
演習や屋外実習を除く全講義については、慶応義塾大学のSchool on Internet Asiaを通じて講義映像を海外に一斉配信し、インドネシアなどから多くのアク

セスがありました。また、屋内演習では、ノートパソコンにフリーのFortranコンパイラーや可視化ソフトをインストールして、データ解析の基礎、気候モデルデータの解析、河川流域のモデル化、水文モデルや生態モデルによる気候変動影響評価、貯水池操作の最適化について、それぞれ実践的な演習を行うことができました。

今回の研修には、国外からはアジア諸国より来日したUNESCO派遣研修生5名、文部科学省UNESCO事業支援経費で招聘した研修生7名、またJSPSメガデルタプロジェクトから2名が参加しました。また、本研修コースは、グローバルCOEプログラム「極端気象と適応社会の生存科学」のセミナー科目としても位置付けられ、現在京都大学に在籍している留学生や研究者ら10名を加えて、合計24名の参加となりました。

受講生にとって、防災研究所を中心とする日本の最前線の研究者から直接指導を受けられただけでなく、普段接することの少ない他国の同分野の研究者と交流できる貴重な機会となりました。最終日には、受講者全員がプレゼンテーションを行い、トレーニングコースで得た知識や経験を各国における実務や研究に活かそうという決意が示されました。

(水資源環境研究センター 田中 賢治)



Maciej Zalewski 教授による講義



屋内演習の様子



野外実習の様子

シリーズ 若手研究者の声

被災地の今

能 登

先日、学部生・修士のときにその活動に参加していた「KOBE 足湯隊^{*1}」の活動報告会に参加してきました。この報告会では今年（2014年）で8年目を迎える能登半島地震の被災地の現状をとりあげ、災害発生から年月が経った被災地に対しボランティアがどのような関わりを持つことができるかについて話し合いました。この場では能登における大きな問題として過疎化が取り上げられました。日本の地方ではどこでも過疎化が問題となっていますが、能登も例外ではありません。地震前から過疎化は進行していましたが、そこに能登半島地震が追い打ちをかけ、さらに過疎化が加速しました。災害によって伏在していた社会問題が顕在化するとよく言われていますが、能登では過疎化の加速という形で表れています。「このままではまちがなくなるかもしれない」という声が能登の人からあったぐらいです。

このような過疎化に対する打開策の一つとして、「よそ者」の刺激による地域の活性化が考えられます。この点で外部からボランティアが被災地に入るということは重要な意味を持ち、また実際に期待されています。現に昨年の「KOBE 足湯隊」の派遣において、「来てもらえるだけでうれしい」という声があったそうです。発災から何年たっても被災地にはボランティアのニーズが存在していることを感じさせられました。

神 戸

私が以前住んでいた神戸も阪神淡路大震災の被災地です。現在の神戸における問題の一つとして復興住宅におけるコミュニティの崩壊が挙げられます。神戸在住のときには「NPO 法人よろず相談室^{*2}」の活動に参加し、復興住宅に住む高齢者への戸別訪問活動を行っていました。復興住宅を訪問すると、一人暮らしの高齢者が非常に多いことを感じます。これは復興住宅への入居時に高齢者及び障害者がいる世帯が優先されたためです。また、彼らの多くが避難所から仮設住

宅へ、仮設住宅から復興住宅へと、2度に渡るコミュニティの分断を強いられていて、そのたびに友人や顔見知りと離れ離れになりました。そのため、復興住宅に住む住民間のつながりは希薄であり、孤独死や自殺が問題となってきました。

今年で阪神淡路大震災から20年目となりますが、復興住宅における高齢化はますます進行し、亡くなる方も増えてきています。このような中では復興住宅におけるコミュニティの維持はさらに難しくなっています。

一人暮らしの高齢者の孤独死は日本全国で報じられていますが、神戸では震災を機に立てられた復興住宅において非常に問題となっています。これも震災によって社会問題が顕著に表面化した事例の一つです。

被災地への私のかかわり方

新たな災害が起きると大衆の関心は新たな被災地に移っていきます。しかし、被災者の方々は自分に降りかかった災害とずっと戦い続けているのです。今後も何らかの形で被災者への支援にかかわり続けていきたいと思っています。

私は発生した地震の震源過程（地震がどのように成長し、どのように終わっていくか）を研究しています。理学的な研究ではここで提起した問題を直接的に解決することはできませんが、地震メカニズムや強震動に関する研究が地震による死傷者や倒壊家屋の減少などにつながれば上記の問題を間接的に軽減することはできるのではと考えています。

（地震災害研究部門 久保 久彦 [理学研究科 D3]）

- * 1 KOBE（阪神淡路大震災の被災地）から全国の被災地へ「足湯」を届ける活動を行っている学生災害ボランティア団体。ここでの足湯は、足をお湯につけてもらい、手を揉みながら被災者の方と話すことで、普段あまりことばにすることのない被災者の声を聞くボランティア活動を指す。
- * 2 阪神淡路大震災にあった一人暮らしの高齢者や東北地方太平洋沖地震の被災者、これらの震災で障害を負った人々の支援などを行っている。



足湯ボランティアの様子



復興住宅の様子（HAT 神戸）

掲示板

平成 26 年度共同研究・研究集会

一般共同研究

研 究 課 題	(研究年度)	研究代表者 (研究代表者の所属機関)	所内担当者
京都大学に所蔵されている自然災害史料の解読と画像化	(25・26)	中西 一郎 (京都大学大学院理学研究科)	加納 靖之 (地震予知研究センター)
多周波音波探査による沿岸表層堆積物中に記録された津波、洪水イベントの可視化	(25・26)	原口 強 (大阪市立大学大学院理学研究科)	平石 哲也 (流域災害研究センター)
詳細湖底地形調査に基づく琵琶湖湖底断層位置の特定および湖内急斜斜面の地震時安定性評価	(25・26)	竹村 恵二 (京大大学院理学研究科附属地球熱学研究施設)	釜井 俊孝 (斜面災害研究センター)
福島原発事故に伴う放射性物質の初期拡散沈着過程把握のためのデータベース構築	(25・26)	谷田貝 亜紀代 (名古屋大学太陽地球環境研究所)	寶 馨 (社会防災研究部門)
原子力災害時の緊急対応のためのマルチスケール大気拡散予測モデリングに関する研究	(25・26)	中山 浩成 (日本原子力研究開発機構)	竹見 哲也 (気象・水象災害研究部門)
General Collaborative Research on Assessment of Collapse Safety Margin in High-rise Steel Framed Structures under Extreme Earthquake Loading Beyond Current Code Specifications	(25・26)	Gilberto Mosqueda (カリフォルニア大学サンディエゴ校)	中島 正愛 (地震防災研究部門)
新しい津波避難支援ツールの開発と実装ー全国最悪の想定に挑むー	(25・26)	城下 英行 (関西大学社会安全学部)	矢守 克也 (巨大災害研究センター)
建物等構造要素毎の被害評価による竜巻等の突風風速推定指標の策定 (日本版Enhanced Fujita Scaleの策定に向けて)	(25・26)	前田 潤滋 (九州大学大学院人間環境学研究院)	丸山 敬 (気象・水象災害研究部門)
薄膜型ナノ工学センサを使用した鋼構建造物の被災後即時健全性モニタリング	(25・26)	Jerome P. Lynch (ミシガン大学)	倉田 真宏 (地震防災研究部門)
高潮予測に対する高波浪、強風下のエアレーションへの混相流体力学的寄与	(25・26)	渡部 靖憲 (北海道大学大学院工学研究院)	森 信人 (気象・水象災害研究部門)
気象レーダによる噴煙の実態解明と火山防災	(25・26)	真木 雅之 (鹿児島大学地域防災教育研究センター)	井口 正人 (火山活動研究センター)
「阪神・淡路20年」の記憶を伝えるー「Disaster Eve」と「定点観測+ (プラス)」の取り組みを通じてー	(26・27)	船木 伸江 (神戸学院大学防災・社会貢献ユニット)	矢守 克也 (巨大災害研究センター)
高速で桜島火道内を上昇するマグマを、高品位重力連続データ・宇宙線軟成分観測・地殻変動連続観測で視る	(26・27)	大久保 修平 (東京大学地震研究所)	山本 圭吾 (火山活動研究センター)
地域防災へ適用するための簡便な斜面危険度評価手法の開発	(26・27)	藤本 将光 (立命館大学)	藤田 正治 (流域災害研究センター)
大阪湾GPSと超高解像度レーダーを用いた大阪湾域の極端気象予測精度の向上に関する研究	(26・27)	大石 哲 (神戸大学)	山口 弘誠 (気象・水象災害研究部門)
高潮・波浪災害リスク軽減に向けた台風通過時の海洋構造および大気・海洋・地盤相互作用に関する現地調査	(26・27)	内山 雄介 (神戸大学大学院工学研究科)	森 信人 (気象・水象災害研究部門)
不確実性を伴う災害情報の表現方法に関する言語学的検討	(26・27)	新井 恭子 (東洋大学)	本間 基寛 (気象・水象災害研究部門)
コンクリートブロックの乾式組積による組立制震壁の開発	(26・27)	山口 謙太郎 (九州大学大学院人間環境学研究院)	川瀬 博 (社会防災研究部門)
Real-time personal seismic risk mitigation via structure-specific early warning systems	(26・27)	Iunio Iervolino (University of Naples, Federico II)	倉田 真宏 (地震防災研究部門)
津波を起こした湖底地すべりの搜索とその形態学的研究	(26・27)	山崎 新太郎 (北見工業大学)	松四 雄騎 (地盤災害研究部門)
制振素材による木造住宅の耐力劣化抑制に関する研究	(26・27)	那須 秀行 (日本工業大学)	川瀬 博 (社会防災研究部門)

萌芽的共同研究

研 究 課 題 (研究年度)	研究代表者 (研究代表者の所属機関)	所内担当者
海陸一体の地形分類に基づく大規模地すべり地形の抽出 ー南海トラフを含む西南日本外帯を対象としてー (26)	岩橋 純子 (国土地理院 地理地殻活動研究センター)	松四 雄騎 (地盤災害研究部門)
積雪荷重と融雪水が再活動型地すべり地の水分浸透特性に与える影響 (26)	大澤 光 (京都大学大学院理学研究科)	松浦 純生 (地盤災害研究部門)
巨大噴火に対する避難計画の実現性の解明 (26)	玉置 哲也 (京都大学大学院情報学研究科)	多々納 裕一 (社会防災研究部門)
バングラデシュにおける竜巻等シビアストームの安定度指数を用いた 予測に関する研究 (26)	山根 悠介 (常葉大学教育学部)	林 泰一 (流域災害研究センター)
災害復興過程における被災住民とマスメディアの関係性 ー茨城県大洗町を例にー (26)	李 勇昕 (京都大学大学院情報学研究科)	矢守 克也 (巨大災害研究センター)

一般研究集会

研 究 集 会 名 (研究年度)	研究代表者 (研究代表者の所属機関)	所内担当者
開催予定日：下段		
平成26年度 自然災害に関するオープンフォーラム「南九州・南西諸島海 域における巨大津波災害の想定（仮題）」 (26)	浅野 敏之 (鹿児島大学地域防災教育研究センター)	中川 一 (流域災害研究センター)
平成26年9月23日		
地下街・地下鉄の水害リスクマネジメント (26)	戸田 圭一 (京都大学大学院経営管理研究部 (工学研究科併任))	馬場 康之 (流域災害研究センター)
平成26年12月4日		
想定を超えた大振幅予測地震動に対する建築物耐震設計の新たな方向性 (26)	林 康裕 (京都大学大学院工学研究科)	川瀬 博 (社会防災研究部門)
平成26年9月26日～ 27日		
震災復興から減災社会を目指す防災ネットワーク形成のための研究集会 (防災計画研究発表会2014) (26)	高木 朗義 (岐阜大学工学部)	多々納 裕一 (社会防災研究部門)
平成26年9月26日～ 27日・平成27年3月16日		
活断層とノンテクトニック断層：起震断層の正しい認識と評価基準を探る (26)	遠田 晋次 (東北大学災害科学国際研究所)	千木良 雅弘 (地盤災害研究部門)
平成26年7月4日～ 5日		
総合的防災教育の構築に関する研究集会 (26)	中井 仁 (小淵沢総合研究施設)	矢守 克也 (巨大災害研究センター)
平成26年11月24日		
防災教育の実践と理論 研究集会 (26)	大木 聖子 (慶應義塾大学環境情報学部)	矢守 克也 (巨大災害研究センター)
平成26年8月21日～ 22日		
伝統木造建物の耐震性評価方法の画一化に向けた研究集会 (26)	多幾山 法子 (首都大学東京)	牧 紀男 (社会防災研究部門)
平成26年11月7日		
地殻電気伝導度不均質構造に関する研究集会 (26)	橋本 武志 (北海道大学大学院理学研究院)	吉村 令慧 (地震防災研究部門)
平成27年1月8日～ 9日		
断層強度と地殻深部流体の物理化学的特性にかんする新たな 学際的取り組み (26)	河村 雄行 (岡山大学大学院環境生命科学研究科)	伊藤 喜宏 (地震予知研究センター) 加納 靖之 (地震予知研究センター)
平成26年8月26日～ 28日		

短期滞在型共同研究

研 究 課 題 (研究年度)	研究代表者 (研究代表者の所属機関)	所内担当者
Vertical Evacuation policies in Japan and in the USA (26)	Lucia Velotti (School of Public Policy and Administration, University of Delaware)	矢守 克也 (巨大災害研究センター)
Monitoring bedload in Japanese Torrents and preparation of the 8th International Gravel Bed River Workshop (26)	Jonathan B. Laronne (Ben Gurion University of the Negev)	藤田 正治・堤 大三 (流域災害研究センター)
Study on inhomogeneity in the resistivity structure along the ruptured fault plane of the 1999 izmit earthquake, -- Asperity distribution from resistivity structure along the fault -- (26)	Elif Çiftçi (Boğaziçi University, Kandilli Observatory & E.R.I.)	大志万 直人 (地震防災研究部門)
森林の管理状況が河道災害のポテンシャルへ与える影響評価へ向けた萌芽的観測研究 (26)	武藤 裕則 (徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部)	水谷 英朗 (流域災害研究センター)
Reliability-based engineering modeling of wind vulnerability for residential buildings in China (26)	Shuoyun, Zhang (Department of Civil Engineering, College of Basic Education, National University of Defense Technology)	西嶋 一欽 (気象・水象災害研究部門)

長期滞在型共同研究

研 究 課 題 (研究年度)	研究代表者 (研究代表者の所属機関)	所内担当者
Creating a comprehensive database of long-term denudation in the Japanese mountains (26)	Alexandru T. Codilean (University of Wollongong, School of Earth & Environmental Sciences)	松四 雄騎 (地盤災害研究部門)
Comparison study on the coseismic fluidized landslides in Chinese loess area and Japanese pyroclastic area, and hazard mitigation (26)	Fanyu Zhang (Lanzhou University)	王 功輝 (斜面災害研究センター)
Response of Atmospheric Aerosols to Extreme Meteorological Events: Estimate Effects in The Present and Twenty Second Century (26)	Sanat Kumar Das (Bose Institute)	石川 裕彦 (気象・水象災害研究部門)

重点推進型共同研究

研 究 課 題 (研究年度)	研究代表者 (研究代表者の所属機関)	所内担当者
自然災害科学に関わる研究者・ステークホルダーとの協働による総合防災学の活用に関する研究 (26)	廣岡 俊彦 (九州大学大学院理学研究院)	松浦 純生(地盤災害研究部門)、 釜井 俊孝(斜面災害研究センター)、 平石 哲也(流域災害研究センター)、 横松 宗太(巨大災害研究センター)
突発災害時における初動調査体制の拡充および継続的調査研究の支援 (26)	廣岡 俊彦 (九州大学大学院理学研究院)	松浦 純生(地盤災害研究部門)、 釜井 俊孝(斜面災害研究センター)、 平石 哲也(流域災害研究センター)、 横松 宗太(巨大災害研究センター)

拠点研究（一般推進）

研 究 課 題 (研究年度)	研究代表者
陸上に遡上する巨大津波の建物・市街地スケールの力学的挙動把握と脆弱性評価に関する研究拠点形成 (26)	森 信人 (気象・水象災害研究部門)
想定南海地震の広帯域強震動予測と地震被害想定的高度化に関する研究 (26)	岩田 知孝 (地震災害研究部門)
「流域一貫の総合流木管理」の体系化のための学際的研究拠点の形成 (26)	角 哲也 (水資源環境研究センター)
気象・地象・水象統合モニタリングシステムの構築 (26)	松四 雄騎 (地盤災害研究部門)
プータンヒマラヤのサイスモテクトニクスの研究 (26)	大見 士朗 (地震防災研究部門)

拠点研究（特別推進）

研 究 課 題 (研究年度)	研究代表者
地震による深層崩壊発生危険度マッピング (26)	千木良雅弘 (地盤災害研究部門)

特定研究集会

研 究 課 題	(開催予定日)	研究代表者
地震・自然災害のための測地学国際シンポジウム (GENAH2014) (平成26年7月22日～ 26日)		橋本 学 (地震予知研究センター)
防災経済分析に関する研究集会 (平成26年4月17日 (2か月に1回程度開催予定))		多々納裕一 (社会防災研究部門)
生態系を考慮した総合流域管理とリスクマネジメント (平成26年12月1日)		堀 智晴 (水資源環境研究センター)
西日本大震災の減災に向けたスロー地震研究の今後の可能性 (平成26年9月8日～ 10日)		伊藤 喜宏 (地震予知研究センター)
第5回総合防災に関する国際会議 (平成26年10月30日～ 11月1日)		横松 宗太 (巨大災害研究センター)

平成 25 年度学会賞等の受賞一覧 (受賞日順)

受賞者 (教職員)	受 賞 内 容	受賞日
樋本 圭佑	文部科学大臣表彰若手科学者賞 (科学技術分野)	平成25年 4 月16日
宮澤 理稔	文部科学大臣表彰若手科学者賞 (科学技術分野)	平成25年 4 月16日
向川 均/黒田 友二	日本気象学会賞	平成25年 5 月16日
西村 卓也	日本地震学会論文賞	平成25年 5 月21日
浅野 公之	日本地震学会若手学術奨励賞	平成25年 5 月21日
中川 一	The Qian Ning International Prize for Erosion and Sedimentation Technology, WASER (World Association for Sedimentation and Erosion Research) & The Qian Nign Foundation for Erosion and Sedimentation Technology	平成25年 9 月 1 日
張 浩/中川 一/水谷 英朗	2010-2012 Best Paper Award of International Journal of Sediment Research, WASER (World Association for Sedimentation and Erosion Research)	平成25年 9 月 5 日
水谷 英朗/中川 一/川池 健司/ 張 浩/Quentine Lejeune	Excellent Paper Award, The 12th International Symposium on River Sedimentation, Kyoto, Sept. 2-5, 2013	平成25年 9 月 5 日
小林 草平/竹門 康弘	第17回応用生態工学会研究発表会優秀発表賞	平成25年 9 月21日
梶谷 義雄/多々納 裕一	自然災害学会学術賞	平成25年 9 月25日
三浦 勉	地震火山災害予防賞	平成26年 1 月 6 日
中島 正愛	全米地震工学会 George W. Housner Medal	平成26年 2 月 4 日

受賞者 (学生/受賞当時)	受 賞 内 容	受賞日
小槻 峻司 (DC3)	日本リモートセンシング学会優秀論文発表賞	平成25年 5 月17日
松下 紘資 (DC2)	国際航路協会若手最優秀論文賞 PIANC De Paepe-Willems Award	平成25年 5 月21日
日高 拳 (MC1)	土木学会関西支部年次学術講演会優秀発表賞	平成25年 6 月 9 日
青木 将 (DC1)	日本地球惑星科学連合固体地球科学セクション学生優秀発表賞	平成25年 6 月17日
中野 貴史 (MC1)	日本地球惑星科学連合大気水圏科学セクション学生優秀発表賞	平成25年 6 月17日
小槻 峻司 (DC3)	Outstanding presentation award of the 6th APHW Conference	平成25年 8 月20日
峠 嘉哉 (DC2)	Outstanding presentation award of the 6th APHW Conference	平成25年 8 月20日
大澤 光 (DC1)	日本地すべり学会第52回研究発表会若手ポスター賞	平成25年 8 月30日
峰岸 楓 (MC2)	2013年日本建築学会優秀卒業論文賞	平成25年 8 月30日
孫 英英 (DC3)	日本質の心理学会第10回大会優秀ポスター賞	平成25年 8 月31日
李 勇昕 (DC2)	質の心理学会研究2013年度研究奨励賞	平成25年 9 月 1 日
前田 純伶 (MC2)	日本地質学会第120年学術大会 (2013年仙台大会) 優秀ポスター賞	平成25年 9 月14日
中町 聡 (MC2)	雪氷研究大会 (2013・北見) ポスター発表部門学生優秀発表賞	平成25年 9 月20日
Kim Namgyun (D2)	第32回日本自然災害学会学術発表優秀賞	平成25年 9 月24日
小槻 峻司 (DC3)	水文・水資源学会論文奨励賞	平成25年 9 月26日
木下 千裕 (MC2)	日本地震学会学生優秀発表賞	平成25年11月29日
中居 楓子 (MC2)	情報処理学会山下記念研究賞	平成26年 3 月11日
中居 楓子 (MC2)	情報処理学会第76回全国大会学生奨励賞	平成26年 3 月13日
中居 楓子 (MC2)	情報処理学会情報システムと社会環境研究会若手奨励賞	平成26年 3 月17日

■ 中島正愛教授 2014 年度 George W. Housner Medal 受賞



地震防災研究部門中島正愛教授は、2014 年度の George W. Housner Medal を受賞しました。これは、世界の地震工学を牽引する Earthquake Engineering Research Institute（米国地震工学会）が授与する同会最高の賞で、地震工学において極めて顕著な功績のあった個人が毎年 1 名選ばれます。第 1 回の受賞者は、地震工学の父と呼ばれる故 George W. Housner 博士（カリフォルニア工科大学）、同賞 25 年の歴史のなかで中島教授は、日本人として初の受賞となりました。受賞理由として、構造物の地震時応答を再現するオンラインハイブリッド実験法の開発と適用に関する先駆的な研究、耐震工学の高度化に資する大型振動台を用いた多数の実験的研究、地震工学に関わる日米共同研究の推進と長年にわたるリーダーシップ、が挙げられています。なお授賞式は、2014 年 7 月に米国アラスカで開催される第 10 回米国地震工学会議中に執り行われます。

■ 新スタッフ紹介



巨大災害研究センター 教授 あな まり あくろーず Ana Maria CRUZ

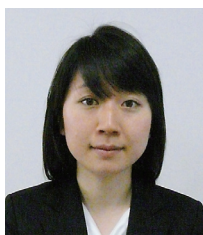
I am a new Professor at the Disaster Reduction Systems Center since 2014/05/01. I am a chemical engineer with work experience in industry. I hold a MSc. in Applied Development and a Ph.D. in Environmental Engineering from Tulane University (USA). I was a JSPS Fellow with Prof. Okada in 2004-6. Since 2009, I have visited DPRI every year as a visiting professor in Prof. Takara's GCOE-ARS program and have an ongoing French-Japanese research project with Prof. Tatano concerning chemical accidents triggered by the Tohoku earthquake and tsunami, among other projects. I worked as an international consultant in France, was a senior scientist at the Joint Research Centre, European Commission (Italy), and an assistant professor at North Texas University (USA). My research concerns industrial risk management and emergency planning for joint natural and technological disasters (known as "Natechs"). My overall goal is to contribute through research and education to disaster risk reduction from large scale disasters (LSD) impacts on industry and related infrastructures, and to increase societal resilience to Natechs through integrated disaster risk management.



技術室 た な か だいすけ 田中 大資

平成 26 年 4 月 1 日付で技術室に配属になりました。6 月末までの 3 カ月間、技術室での研修を受けた後、担当する技術支援先が決まる予定です。

高校での理科選択は物理と化学でしたが、大学では生物学を専攻していました。北海道大学理学部生物科学科を卒業し、京都大学大学院医学研究科を修了しました。北海道大学ではサラブレッドの病気について研究し、京都大学ではラットを使って病気を研究していました。両者とも原因遺伝子の特定を目的とした研究でした。北海道大学から来た身としては、研究活動を通じて京都大学のレベルの高さを実感しており、京都大学で働けることを大変うれしく思っています。また、科学全般に興味がありますので、これまで深く触れることのなかった防災学について、これから学べることをとても楽しみにしています。大学で専攻した生物学と防災学は全く異なる分野ですが、3 カ月間の研修で色々なことを吸収し、実務においても先生方や先輩方のご指導の下、様々な技術を身につけ、1 日でも早く皆様のお役に立ちたいと考えています。慣れない分野と環境の中、迷惑をおかけすることもあると思いますが、一生懸命頑張って参りますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。



技術室 ^{なみぎし} 波岸 ^{あやこ} 彩子

平成 26 年 4 月 1 日付で技術室に配属となりました。4 月から 6 月までの 3 カ月間、3 つの実験室と地震予知センター、および穂高の観測所にて研修を受けた後、技術室内での担当が決まる予定です。

学部時代は京都大学農学部にて土壌学を専攻しておりました。また、3 月に修了いたしました京都大学大学院地球環境学舎修士課程では、ベトナム中部の山間少数民族の集落における人々の生業、および内水面に生息する淡水魚を主とした内水面資源の利用状況を研究するため、フィールドワークに取り組んで参りました。調査で滞在していたベトナム中部の都市では、雨季の洪水によって町全体が水に浸かるということもしばしばありました。そんなときでも、子供ははしゃぎまわり、老人は何食わぬ顔で将棋をうち、大人たちは仕事が休みになるのを喜ぶなど、まるで年に一度のイベントを楽しむかのように対応していました。自然災害に対する彼我の認識や考え方の違いに大きく驚かされました。

今まではまったく異なる分野に属していた私ですが、社会に対して大きな責任をもつ防災の分野で働くことができることを大変光栄に思います。技術室での職務は多岐に渡っており、当面は新しいことを吸収することに精一杯ですが、一つひとつの業務を着実に覚えてゆきたいと存じます。最後になりましたが、少しでも早く職責を果たせるよう、先輩職員の背中を追って精進して参りますので、叱咤激励のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



特定職員（広報出版企画室） ^{さえき} 佐伯 かおる

2014 年 4 月 1 日付で広報出版企画室に採用されました。3 月末までの 4 年間は、東京大学大気海洋研究所広報室の特任専門員として冊子類の編集全般、SNS やメールマガジンの運営、東大柏キャンパス一般公開や「さいえんす寿司 BAR」（サイエンスカフェのお寿司版。研究所の 1 階に寿司店が併設されていました）の企画運営などを担当していました。もともとは専門書の編集者です。当時は京大会館の中にあった京都大学学術出版会で人文系の専門書の編集を担当していました。さらに学生時代は文学部で美術史を専攻していました。……というわけで、それまでの 20 年弱も京都で過ごしておりましたので、京都や京大になじみがないわけではありません。ですが、宇治キャンパスに来たのはこの職の公募の面接のために防災研究所を訪れた時が初めてです。着任早々 4 月 2 日に連れて行っていた宇治川オープンラボラトリーは敷地に桜が満開で、こんな綺麗な場所であることはもっと広く知られていいのではと思いました。これから防災研究所のことを知っていき、広報に努めてまいりたいと存じます。どうぞご指導のほどよろしくお願い申し上げます。



専門職員（防災研究所担当事務室） ^{きむら} 木村 ^{ともこ} 智子

平成 26 年 4 月 1 日付けで、防災研究所担当事務室専門職員として着任しました。今まで京都大学の様々な部局において、主に総務系の業務を行ってきましたが、同じ部局への異動は一度も無く、今回が初の防災研究所へ二度めの勤務となりました。前回は初めての宇治キャンパス勤務で、阪神・淡路大震災直後の 2 年間の勤務でしたので、久方ぶりの宇治は、初めて訪れた地のごとく変貌を遂げていましたが、当時から在職されておられます先生や職員の方々にお会いできて、少し安堵しました。東日本大震災の 3 年後に、また防災研究所に勤務することになり、さきの勤務で触れることのなかったことを探求したいと思います。また、宇治地区の事務部体制も変容しており、昨年度の 3 月まで勤務していました本部構内（理系）共通事務部との違和感を覚える日々ですが、円滑な事務を推進していきたいと考えています。未知なる地への関心が強く大自然の中を歩き回ることが楽しみなのですが、家庭の事情もあり暫くは望みが叶いそうにありませんが、いつかの自分へのご褒美を心の糧に、情報収集をしているこの頃です。

今までとは異なる業務もあり不安はありますが、防災研究所の一員として担当事務を執り行っていけるように努めてまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

人事異動

《転入等》

〈平成 26 年 4 月 1 日付〉

[採用]

田中 大資 技術室
波岸 彩子 技術室

佐伯かおる 広報出版企画室特定職員
(←東京大学大気海洋研究所広報室特任専門員)

[着任]

浅井 正彦 防災研究所事務長 経理課長兼務

[配置換]

木村 智子 総務課専門職員(総務掛(防災研究所担当事務室))
(←本部構内(理系)共通事務部総務課掛長)

[昇任]

園田 忠臣 技術室観測技術グループ長
(←技術室観測技術グループ副グループ長)
米田 格 技術室機器開発技術グループ主任
(←技術室機器開発技術グループ室員)

〈平成 26 年 5 月 1 日付〉

[採用]

Ana Maria CRUZ 教授 巨大災害研究センター
(←Independent Consultant. Natechs and Integrated Risk Management.
Invited Professor, Ecole des Mines de Saint Etienne, France.)

《転出等》

〈平成 26 年 3 月 31 日付〉

[辞職]

田村 修次 准教授 地震災害研究部門
(→東京工業大学大学院理工学研究科准教授)

福岡 浩 准教授 斜面災害研究センター
(→新潟大学災害・復興科学研究所教授)

樋本 圭佑 助教 社会防災研究部門
(→(独)建築研究所主任研究員)

[任期満了]

大山 達夫 広報出版企画室特定職員

[配置換]

KIM, Sunmin 特定准教授 気象・水象災害研究部門
(→本学大学院工学研究科准教授)

東 年昭 専門員(防災研究所担当事務室長)
(→総務課課長補佐)

「複雑化する巨大災害に対する総合防災学確立に向けた最先端国際共同研究」ニュースレター No.3 のご案内

日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」の採択課題「複雑化する巨大災害に対する総合防災学確立に向けた最先端国際共同研究」(平成 23～25 年度)の平成 25 年度の活動に関して、ニュースレター No.3 を作成しましたので、ご覧ください。平成 25 年度は最終年度にあたり、派遣された若手研究者からの充実した滞在先での活動状況と研究成果報告によってページ数が増えました。また、平成 26 年 3 月に行われた、「巨大災害の強震動・サイト特性およびリスクの評価に関する国際ワークショップ」の中では、派遣若手研究者による講演と地震被害リスク軽減に向けたパネルディスカッションも行われました。

本事業は平成 25 年度をもって終了しましたが、最先端国際共同研究の成果は学術論文として実りつつあり、また、若手研究者の派遣によって培われた国際研究ネットワークは防災研究所の国際的研究活動の発展・展開に大きく寄与するものと期待されます。
(若手育成ワーキンググループ 岩田 知孝)

編集後記



撮影：H.M

風薫るさわやかな季節になりました。防災研究所では、新たなスタッフを迎え、共同研究をはじめとする新たな活動が始まりました。本号では、2 月の平成 25 年度防災研究所研究発表講演会などの昨年度の活動の報告とともに、この新しい動きをまとめました。

連休中に、インド亜大陸北東部のアッサム、メガラヤ、バングラデシュを訪れました。毎年のよ

うに、洪水やサイクロン(熱帯性低気圧)に襲われ、被害が発生する地域です。今年は、記録的な少雨状態が昨年から続き、水力による電力供給が十分できないため、滞在中は、連日長時間の停電を経験しました。極端気象の生活への影響の一端を垣間見た感じがしています。本号の「若手研究者の声」の記事のように、実際に災害現場を訪れ、被災の状況を体験することの大切さを感じています。(T.H)

編集：広報出版企画室 広報・出版専門委員会

発行：京都大学防災研究所

連絡先：〒611-0011 宇治市五ヶ庄

TEL：0774-38-4640 FAX：0774-38-4254

URL：http://www.dpri.kyoto-u.ac.jp/

ご意見・ご要望は下記までお寄せください。

e-mail: dpri-ksk@dpri.kyoto-u.ac.jp